

札幌自由が丘学園スタッフのエッセイ集（2005.8.18～10.25 N031-45）

3 1	ジョー	畑中紀世彦	2005.8.18
3 2	不登校数の減少！？	亀貝一義	2005.8.24
3 3	「選択 自信」	田房絢子	2005.8.31
3 4	夏が来た（その2）	杉野建史	2005.9.2
3 5	ナビ子さん	芳賀 慈	2005.9.4
3 6	ダンシャクイモの話	亀貝一義	2005.9.7
3 7	夏が来た（その3）	杉野建史	2005.9.15
3 8	子どもの権利条例（制服問題）	亀貝一義	2005.9.22
3 9	「母ちゃんはエライ！」 パート2	金澤拓紀	2005.9.25
4 0	徒然草（「ウソ」の話）	木村玲子	2005.9.27
4 1	山城俊昭さんがやりとげたこと	亀貝一義	2005.10.04
4 2	「わからない」がわからない！？（その1）	杉野建史	2005.10.20
4 3	「わからない」がわからない！？（その2）	杉野建史	2005.10.21
4 4	Yちゃん	芳賀 慈	2005.10.22
4 5	「わからない」がわからない！？（その3）	杉野建史	2005.10.25

3 1 . ジョー 畑中紀世彦 2005.8.18

『今年の春で、ついにオジさんになった。』

うちの生徒が を読んだら、「そんなのはもう分かっているよ。」と笑言するだろう。

オジさんといっても、足の親指から太い毛が生えているとか、寄せるとできるデコのしわが消えなくなったとかそんなものではない。ついに甥っ子ができたのだ。

私には4歳違いのネエ（姉）がいて、小さい頃はよく殴られていじめられたもんだった。でも他人に泣かされたときなんかは、ネエは相手を探しだしてかたきをとってくれたし、また慰めてもくれた。まるで兄のようなたのもしい姉だった。そんなネエでも結婚をして子供ができた。双子の予定であったが、胎内で一人死産してしまい生まれてきたのは一人。名前は『丈』（ジョー）、外国人でも呼びやすい名前にしたかったからだそう。神奈川にいるのでなかなか会えないが来月やってくる（^^）。

思い起こせば海岸で子供に「ねえねえ、オジさん何しているの？」と聞かれ、「オジさんって誰だ！」と辺りを見回しても自分しかいない寂しい現実と直面してから早3年、とうとう正真正銘のオジさんになったのだ。なぜか今は自分がオジさんということが素直に受け入れられるし、オジさんと呼ばれることに清々しささえ感じられる。早く丈にも『オジさん！』と呼ばれないかなあ。もうハイハイするくらいになっただろうか。そしたら掛ける言葉はやっぱり「立て！立つんだジョー！」だよなあ。

3 2 . 不登校数の減少！？ 亀貝一義 2005.8.24

先日、「不登校」をテーマとした集まりに参加した。父母や、学校と塾の教師、学生など全体の数は多くなかったが、非常に多様な人たちだった。その中で、札幌の学校の教師の発言がきわめて印象的だった。それは、8月11日に各紙で報道された「不登校児童生徒数の減少」記事についてである。各学校は「不登校数」をなんとかして少なくしたいと願っているのだそう。だから、年間30日の欠席数にいたらないように工夫したり、本当は欠席に相当するのだが、いろいろな手を使って(校門にタッチするとか、ファクスでのやりとりなども含めて)登校日数カウントをすること。だから、多くの学校の先生方は「不登校数字の減」は誰も信用していないと、その先生は強調した。それだけしても、不登校の数字は若干減っても割合は変わっていないのである。大阪府の太田知事が今年の1月に「[3か年で不登校半減](#)」という目標を掲げたが、多くの反対意見の中で8月2日事実上の『骨抜き』に手直しせざるを得なかったという。しかしこういう子どもの気持ちと今日の教育と学校の在りようを考えない非現実的な「不登校減少政策」はますます上のようなやり方を進めていくことが予想される。

33. 「選択 自信」 田房絢子 2005.8.31

今の社会ではなにかしようと思うと様々な方法がある。高卒を取るのだって、全日制・単位制・通信制、それに高卒程度認定試験などというのもある。人と同じであることが模範解答ではない時代になって、自分らしいものを選ぶ世の中になった。選択することは大変だけど、そうやって自分で選んだ道では、きっと自信を持って生きていけるのではないかと思う。

そんな中、自由が丘を選んでくれたたくさんの人に出会ってきた。そしてたくさんの悩みも聞いてきた。スタッフとしてはもちろんだけれど、面談担当としては、自由が丘に入学した生徒の変化を見るのはとても感慨深いものがある。初めて面談した時、私の視線を避けるように俯いていたAさん。毎日通うことは難しいと言われていたBくん。でもそれから元気に笑顔で登校している姿を見ていると、なんとも言えない幸せを感じる。自分自身を癒す力、変える力は誰でも持っている。その力の強さ、秘めた可能性に日々驚きを感じている。

自由が丘を選択肢の1つとして通り過ぎ、ほかの道を選んだ子たちは今ごろ何をしているのだろうか。元気にやっているだろうかと、余計なお世話を焼いて、ふと心配になることがある。ただ、どんな道を歩いていくにせよ、苦労もたくさんするだろうけれど、笑顔を忘れることのない道を進んで欲しいと思う。

34. [夏が来た\(その2\)](#) 杉野建史 2005.9.2

北海道もまだ暑い夏が続いている。

先日、1年生と芦別にある星槎国際高等学校の本部校へ「夏期スクーリング」へ行ってきた。札幌学習センターの生徒と3泊4日を共に生活する。食事の用意や掃除など身の回りのことを自分自身でしなければならぬ4日間だった。

起床は毎朝6時。消灯10時。普段の生活では“ありえな～い！！”ことである。が、しかし。生徒は立派にやり遂げた。周りの友達を気遣い、身の回りのことをきちんとし、時には？涙あり！？たくさんさんの笑いあり。

できなのではない。する環境にないのだとつくづく感じた。少なくとも4日間、自分の体調と心の管理をしっかりとやり遂げたのである。K君、いろいろ見聞を拓けたね。S君、新しい挑戦をしましたね。Kさん、笑顔を絶やさず楽しんだね。Nさん、めげそうになりながらも夜食おいしかったでしょう。

2005年の暑い夏。たった4日間だったけれど、みんなの記憶に残る4日間であることを願います。引率手伝ってくれたBちゃん、Hさん。本当に有り難う。貴方達のサポートは心強かった！

35. ナビ子さん 芳賀 慈 2005.9.4

便利ですよ、と言われてつけることにしたカーナビ。今年は中学校訪問をしているため、本当に重宝している。電話番号を入れるだけで道案内してくれるのだから、もう地図帳を助手席に広げておく必要もない。

が、慣れてくると、やはりナビ子さんのアナウンスが時々うっとうしい。朝車に乗ると「今日は 月×日 曜日です」と知らせてくれ、小躍りして去っていく。運転を始めて2時間経つと「長時間の運転、ご苦労様です」、夜12時を過ぎれば「深夜の運転ご苦労様です」とねぎらってくれる。「左折」の指示を無視して直進すると、角ごとに「左折」「左折」と追い立てられる。もちろん音声を消すこともできるのだが、せっかくナビ子さんがいるのにそれももったいない。

そのうち、においや音に反応するナビが現れないだろうか。タバコを吸うと「吸い過ぎに注意しましょう」とか、焼き肉屋さんの帰りは「深夜の焼き肉、ご苦労様です」とか、車内で大げんかしたら「次の信号でやめましょう」など。記憶に残るナビもイヤだなあ。「あなた、先週の土曜日もここに来ましたね」など。

そんなことをいろいろと想像できる面白いものを手に入れて、運転がさらに楽しくなったのでした。

36. ダンシャクイモの話 亀貝一義 2005.9.7

5日、高等部の2年生といっしょに吉田弘さん支援で取り組んでいる農場に、ジャガイモの収穫に行った。2年生は、この日少なかったが皆よく働いた。多少腐っていたイモもあったが、山のように収穫することができた。学園祭に提供できるかも知れない、と吉田さんは言っている。これはダンシャクイモだそうだ。

北海道のイモは伝統的にダンシャクイモが最も有名である。メークインなどもあるが、100年前に函館近くの農場で品種改良されたイモが元になっているという。これを行ったのは川田竜吉という造船業を営む男爵だった（男爵は当時の貴族でランク的には一番低い立場）。川田さんは、若い頃イギリスに留学し、イギリス娘のジェニーと恋におちる。しかし諸般の事情でそれは実らなかった。50歳をこえた川田さんは、彼女といっしょに食べた揚げイモの味が忘れられず、何とか北海道の風土に合ったイモを、と考えアメリカからのタネイモを改良したという。彼が男爵であったので、この新しく美味しいイモはダンシャクイモと言われた。

南米のアンデス山地が原産のジャガイモは、ジャガタラ（今のジャカルタ）からオランダ人によって長崎にもたらされた。だからジャガイモということ。しかしなぜ馬鈴薯ともいうのか、まだよく分からない。

サツマイモはルソンから中国を経て琉球に、そして薩摩に来た（だからサツマイモ）。ジャガイモはこれよりも早いのだそうだ（家康のころ）。いずれにせよ、今のイモは江戸時代。

聖徳太子や源頼朝も、イモを食べていたが、そのイモはどういうものだったろうか。

揚げイモを食べたら、川田男爵の若いときを思い出そう。ヨン様の恋の話よりも現実的で、後世の人に幸せを与えた話ではないか。以上のネタは[ここ](#)と[ここ](#)です。

37 . 夏が来た (その3) 杉野建史 2005.9.15

北海道はそろそろ秋の気配がしています...

9月初旬。私の“夏シーズン第一幕”が幕を閉じた。

5年程前からヨットに取り組んでいる。ヨットと聞いて何を思い浮かべるだろう。たいていの人は「中島公園にある手で漕ぐ船でしょう」という。「それはボート」と笑顔で切り返す。

札幌自由が丘学園が1997年からお世話になっている、札幌セーリング協会（波多吉光会長）付属の“札幌ヨット少年団（中里準治団長）”に入団し、いちから習い始めた。

これがとても面白い。海相手に自分の思うようにならない歯がゆさを感じながら、コーチの原芳紀氏（ヨット少年団指導部長）にマンツーマンで教わった。体力と運動神経にかなりの自信があったが、初めて一人乗りのヨットに乗った日に8回も「沈（ちん）」をした。原氏に「ずいぶん楽しそうですね～」と言われたのを覚えている。面白かった。何度も何度も海に落ち、船を起こし乗り込み、また沈みの繰り返し。それまでの「沈」の少年団記録を塗り替えた。

挑戦は何歳からでも始められる。何時からでもできる。習うこと学ぶことに年齢は関係ない。週末になると銭函の海岸へ行き、波多会長の大きくてどこまでも通る声と、原コーチの指示を耳に風と波と青い空と戯れたシーズンが幕を閉じた。学園の生徒に「杉野さん黒すぎ！！」と言われ続けて何年になるだろう。黒さは譲れない。

38 . 子どもの権利条例（制服問題） 亀貝一義 2005.9.22

9月10日（土）の午前、札幌市北口前のエルプラザで「子どもの権利条例」を考える「自由が丘の集い」を開催した。参加者は札幌、月寒それぞれの生徒も含め約40名。学校の先生や父母たちも来てくれた。前半、札幌市子どもの権利条例検討委員長の内田信也弁護士からの話があり、後半は質問や意見発表が行われた。

この集いの内容に関して印象的であった点で「服装問題」についてであった。内田委員長の指摘にもあったが、学校と教育現場が、「子どもの権利」に対しては消極的であると思う。「権利を教えるとわがままになる」とか「これ以上に子どもをあまよわせることは問題」という意見が大きいし多いのだという。例えば、子どもの権利を“危惧”する大きなテーマは制服問題である。「服装の乱れは心の乱れになる」の思想から服装の乱れをただそうとする学校からいえば、「制服なんて強制されるべきでない」という子どもがいれば、困るのである。

多くの中学高校は制服を決めている。中学校高校で制服は次のような意味を持っている。生徒の心を緊張させる、『学校』に通うという自覚がわき上がる、などの一面と、生徒の心をしばる、統制する、自由を拘束する、権威に反発する気持ちを助長する、カネがかかる、自分の服装・容儀を自由にセンスアップする能力をおさえる、などが指摘される。さらに、学校・教師たちは、一定の規制をもっている制服に違反するパターンをつくった生徒に対して叱る、注意する、それでも指示に従わない生徒を「校則違反」として“処分”することになる。結局、制服をきちんと着せることをめぐって、生徒と教師の関係をぎすぎすしたものにしかねないのである。

私が高校にいたとき、この制服を守らせる「指導」が一番きらいだった。そういう気持ちもあって、私たちの学園では制服はつくらない。しかし特に女子生徒ではあった方がいいという意見はむしろ大きい。一定の容儀を強制すべきではないと思う。

子どもの権利条例ができれば、制服に批判的な生徒は当然のことだが、「服装の強制には納得できない」との意見表明権を行使するだろう。それを教師たちはおそれる。そして制服の当否の他に「意見表明権」の扱いをめぐる論争にもなる。自由が丘の「BBS」でサッチャンがこの問題点を指摘している。だから、子どもの権利条例をめぐる議論は心ある生徒の意識をつくるきっかけになるだろう。

39 . 「母ちゃんはエライ！」 パート2 金澤拓紀 2005.9.25

二十歳までは、自分の誕生日をものすごく意識していたことを覚えている。昨日と今日とで、自分という人間が急に変わるわけではないと思いながらも、その節目を迎えるたびに何となく高揚感を抱き続けてきた。

二十代後半で自由が丘と関わるようになってからも、誕生日を祝ってもらう機会は続いているが、三十歳を超えた今ではさすがにそうした高ぶる気持ちは起こりそうにない。

「私も自分の誕生日を祝ってもらうのって違和感があったのよね」と話す妻に、「三十過ぎてからも嬉しいって人はあまりいないんじゃないの」と切り返すと、「昔からそう感じてたからね。でも最近それが何でなのかようやく分かった気がする」と妻は答えた。

「誕生日ってさ、自分がこの世に生まれてきてから、毎年一年ずつ無事健康に生きてこられたことを親や周りの人に感謝したり、その特別な日を家族に祝ってもらったりする日だと思っていたけど…。もっと大事なことがあった。十ヶ月もの間、大変な想いをして私を身籠もり、そして一生懸命に息んで産み落としてくれたお母さんに、『よく頑張ってくれたね。ありがとう！』って言う日なんだよ。これは自分で子どもを産んでみないと全く分からないことだったわ…。」
微弱陣痛によって、第一子の出産に丸一日以上かかった妻の言葉には重みを感じられた。

そして、妻はこう付け加えた。

「今度の誕生日のときには、お義母さんに、『ありがとう』って伝えないとね。」
ここ二年ほど、二十歳の頃までとはまた違った緊張感とともに誕生日を迎えている。

40 . 徒然草(「ウソ」の話) 木村玲子 2005.9.27

先日、生徒たちと読んだ「徒然草」の一節に、「世に語りつたふること」として「多くはみな虚言(そらごと)なり」という段がある(第73段)。とにかく、世間に流布している事柄は「ウソ」が多いと、いろいろなウソについて語っているのだが、ずいぶん斜に構えた見方だなあと、はじめはあまり好きになれなかった。しかし、「いかにも本当らしく、ところどころはっきりしない風をしながら、はしばしを合わせて語るウソは恐ろしい」と、真実味を帯びてだまされやすいウソの怖さを説いているところなど、このところの政界の動きとも重なって、さすがだなあと、感心してしまう。

翻って、自分を省みてみると、事実を少し誇張して語ったり、「ウソも方便」的な、繕いは多少身に

覚えはあるし、また、「聞いていたのと違うなあ」と思ったりしたことも多い。以前勤めていた学校では、生徒たちに「また、やられた」と苦笑する場面も多々あった。

しかし、大量破壊兵器がないのに、「ある」と言ったり、爆弾を仕掛けておいて、仕掛けられたと戦争に突入していったどこかの国の指導者の「ウソ」に比べると“なまっちょろい”ものではないか。国の指導者のウソは全国民を巻き込んで大変な事態をひきおこす。だが、その指導者を選ぶのは国民という、民主主義の時代なのだ。

いつのまにか、歴史の大きな歯車の中で、よく見えないまま、大変なことに足を突っ込むことだけはしたくないと思いながらもいつのまにか染まっていた、なんてことにならないよう、細い目をしっかり見開いていなければ。でも、もしかしたら、もう染まっているのかしら。まったく「恐ろしきことなり」(「徒然草」)と思う昨今である。

4 1 . 山城俊昭さんがやりとげたこと 亀貝一義 2005.10.04

わが学園で、英語を担当(高等部)している山城俊昭さんが、日本の代表的宗教思想家内村鑑三の講演である「後世への最大遺物」の英訳を完成させ刊行にこぎつけた。ついにやりとげたのである!! 内村鑑三は、旧5千円札の新渡戸稲造と同じ頃北大の前身札幌農学校に学んだ。日露戦争時、与謝野晶子が「君死にたまふことなかれ」の詩を読んで反戦を訴えたが、同じく反戦論をとらえた人として教科書に出てくる。キリスト信者としても名高い。この内村が1894年(明27)に箱根クリスチャンサマースクールで講演を行った。これが世に知られる「後世への最大遺物」である。

山城さんは「The Greatest Legacy」と訳して刊行したが、私はこの講演集を読んだのは初めてである。山城さんのおかげで内村の著名な書を読む機会ができたことが感慨深い。

山城さんは、この英訳版(当然日本語も入っている)に添えて「Supplement」を印刷している。「補足」といえばいいのだろうか。興味深かった。この中で、山城さんは、青春時代に内村のこの書に大きな感化を受けたこと、長い間の仕事を一段落させた2003年、62歳の年から思いを新たに英訳に着手したこと、いろいろな人との出会いや協力などについて説明している。04年の暮れに翻訳を完成させた。関わったたくさんの人たちへのクリスマスプレゼントになったと述懐している。

内村鑑三が感化されたクラーク博士の「少年よ、大志を抱け」は、山城さんの仕事の大きなモチベーションになった。その言葉は、単に若者にとどまらずシニアにとっても必要なメッセージであるという。

この英訳は、高校の英語レベルの実力の持ち主であれば、理解できる。誰でもが分かるように念じながら記述したのだろう。だから、英語の勉強をする上でのテキストになること請け合いである。それにしてもよくやったものだ、と感心する。

たくさんの人が、全部でなくても内村が「後世に残すべき第一はカネだ」というあたりから英訳を読んでみたらどうだろう。しかし彼が言いたいことはそんなことではないのだが、内村鑑三の講演では卑近な例から問題の本質に迫っていくのである。

4 2 . 「わからない」がわからない!?(その1) 杉野建史 2005.10.20

先日の授業で「迷う」ことについて講義をした。その前までの授業で「場合の数」について取り組んでいたこともあり、様々な“場合”についての話から“進路”の話に移ったのがきっかけだった。数学的な思考では「何かを求めるのに、必要なものを吟味し、用意し、作業する」手順で進んでいくことが多い。「何を求めるか」がはっきりとしている（理解している）ことが大前提になることは“言わずもがな”である。進路についても似たようなことがいえる。自分の希望が決まれば、必要なこと・そのための準備・行動とそれなりにスムーズに流れていくはずである。実際に昨年度の卒業生や現3年生数名の様子を見ていると、目標を見いだした生徒はひと味違う。

授業の質問で「自分が何に迷っているかわかる人」となげかけてみた。案の定（悲しいかな）わからない生徒が数名いた。もちろん、進路そのものを捉え切れしていないことも大きな要因として考えられる。迷っている（悩んだり考えたり）うちに何に迷っているかを見失うことは悪くない。しかし、私は、生徒に考える力が身に付いていないと痛感し、大反省した。考え方をきちんと教えることはとても大切である。「当たり前だ！」とお怒りになる方が多いのは容易に想像がつく。考え方はもちろんのことだが無数にある。その中のいくつかをしっかりと身につけることの重要性を再認識した。

生徒が頭を抱え込む姿が見たい。一人で頭を抱え込むことが必要。みんなで頭を抱え込むことも必要。「考えてみる～」だけでは問いかけにはならない。すべてを提示してしまうと考えることが減少する。考えることをどのように生徒に要求するか、私もしっかり考える。

43.「わからない」がわからない！？（その2） 杉野建史 2005.10.21

「自分が何をわからないかが、わからない」生徒と向き合い、授業を展開することは「教師の醍醐味の一つだ」と自分に言い聞かせ授業を作りかえた。

理屈くさい話になるのだが、今更ながらにとっても大切なことだと考えたので、頭の中を整理したい。私が考える子ども像の一つは「自ら疑問（なぜ、どうして）を持ち、自分の問題（どうしよう）として捉え、解決するための方法（なんとかしたい）を考え、解決するために行動できる」ことである。様々なところで言われていることと大差ないと思う。

ところが、最初の入り口でつまづいてしまう。疑問を持たない生徒がいる。疑問を「持つことができない」言っても差し支えないかもしれない。これまでの発育の中で「なぜ、どうして」の脳の働きの経験が著しく少ないように思える。脳がもっとも発育する期間になぜ、どうしての回路にたくさんの情報（疑問）が流れないと回路が閉塞してしまうのではないだろうか、私は想像している。大人から「なぜだろうね。どうしてだろうね」の問いかけが少なかったのだろうか。しかし、その時期には戻れない。

札幌自由が丘学園の存在意義をここに見いだすのである。子どもがスタート地点にたったときがスタートである。スタートを切るのにまた一苦労。背中を押したり、手をひっぱったり、一緒に走ってみたり、声をかけ続けたり…。手遅れはない。ないと信じている。まずは親鳥のように雛の口元に「なぜ」を運んでいく。雛が少しでも興味を示す美味しい「なぜ」を。口に含んでくれたら第一段階クリア。食道を通り、「あっ、なぜだ！」と回路になぜが流れ始めたとき、次のステップが見え始める。この話はまだまだ続く…。

44. Yちゃん 芳賀 慈 2005.10.22

初めてできた友だちは、幼稚園のときの Y ちゃん。小学校に入っても同じクラスになり、男の子も交えて休み時間ごとに体育館を走りまわった。そのうち互いの家を行き来するようになり、集めたシールを交換し合い、顔をくっつけて本を読んだ。Y ちゃんが帰るときには「そこまで送る」つもりでおしゃべりしながら歩いていると彼女の家に着いてしまい、また送ってもらうというようなことをしていた。

3年生になって家の仕事の関係で転校が決まり、親が授業中の私を迎えに来たとき、よく一緒に遊んでいた男の子の1人が隣のクラスの Y ちゃんを呼びに言った。突然険しい顔で教室に入ってきて小さな声で「行くから」と言ったらしい。玄関で黄色いかさを広げていたら、ばたばたと足音が聞こえて Y ちゃんが現れたのを覚えている。こんなとき、何て言ったら良いんだろうと、私はただ彼女を見ていた。

それから数十年。彼女は看護師になり、当時の同級生の1人と結婚し、関東に引っ越して3児の母になった。私はいくつかの職を経て、関西から札幌に移り住んで10年になる。先週、その彼女から突然電話があった。何と、札幌に引っ越してきたという。しかも私の家から歩いて10分かからない。幼稚園時代の2人の家よりはるかに近い。早速会う約束をした。「1回遊びに行ったら、すぐには帰らないよ」と笑う声は昔と変わらず、私は今からドキドキしている。

45 .「わからない」がわからない!? (その3) 杉野建史 2005.10.25

鳥のような心境で雛の口元に「なぜ」を運んでいく。雛が興味を示す美味しい「なぜ」を積極的に口に含み、自力で消化できるか、その後に吸収できるかが重要なことである。

消化とは文字通り食べたものを咀嚼し、消化液とよくよく混ぜ、体に吸収できるまで分解する工程のことを言う。消化されたものは、体内に吸収されることになっている。「わかる」こともこれらのことに似ているのではないかと思う。

ところで、消化液は作用する物体が異なる。タンパク質にはこれ、炭水化物にはコレ、と言ったようにである。わかるためにはこの消化液をたくさん持ち合わせている方がよい。この消化液を造るために必要なことが「勉強・学習」である。というと、多くの子どもはいやな顔をするに違いない。多くの親は「解っている!」というのでしょうか。でも、大切なんですよ。生きるために。消化できずに、栄養素を吸収できないと生きていけないことは誰でも理解しているはず。考える力が備わらないと、よりよく生きていくことは不可能です。

情報があふれている現代。めまぐるしく変化する現代。考えることが不得意では生きづらい。考え始めるきっかけは「なぜ、どうして」「知りたい」等であろう。ではどうしたら「なぜ」を持つことができるのだろうか。このごろ私の頭でぐるぐるしながら考えていることは、乱暴な言い方をすれば「これが“なぜ”だよ。これが“不思議”でしょう!」を与えることが、始まりなのではないだろうかということだ。「これを不思議と思いなさい」と。書くことは至極容易である。しかし、難しい。果たしてこの考え方は間違えではないのだろうか。

この話はまだ続く...